

世界動物文学全集

25

野生のガウヤカ

世界動物文学全集

25



講談社

世界動物文学全集25 野生のガラヤカ

昭和55年11月18日 第1刷

著者 デスモンド・バラディ

訳者 藤原英司

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話東京(03) 945-1111 (大代表) 振替東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 1780円



© 藤原英司 1980年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0397-405252-2253 (0)

(文2)

目次

野生のガラヤカ

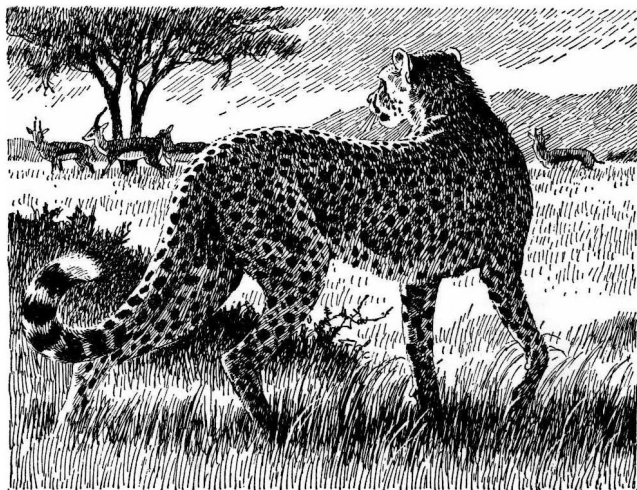
5

解説・藤原英司

364

装幀 蟹江征治

イラスト 田中豊美



野生のガラヤカ

デスモンド・バラデイ
藤原英司 訳

GARA-YAKA' S DOMAIN

by

Desmond Varaday

Copyright ©1966 by Desmond Varaday

Japanese translation rights arranged

with William Collins Sons & Co. Ltd.

through Japan UNI Agency, Inc.

前

篇

主の言葉

これを聞け。

すべてこの地に住む者よ

耳を傾けよ。

あなたがたの世、

または

あなたがたの先祖の世に

このようなことがあつたらうか。

これを

あなたがたの子たちに語り、

子たちは

またその子たちに語り

その子たちは

またこれを

のちの世に語り伝えよ。

……

地よ恐れるな

喜び樂しめ、

主は

大いなることを

行われたからである。

野のもろもろの獣よ

恐れるな、

荒野の牧草はもえいで

木はその実を結び

いちじくの木と

ぶどうの木とは豊かに実る。

(旧約聖書 ヨニル書より)

第一章

南アフリカ中央部の東寄りに、シャシ河とリンボボ河に
はさまれた、三角形の大きな叢林地帯がある。そこは上空
から見ると大きなV字形を成しており、その楔形の開いた
広い部分は、ちょうど、ベチュアナランド保護領の東側の
境界線にあたっていた。

またこの叢林地帯は約百三十平方キロの広さを持つ個人
経営の動物保護区になっでいて、この世のものとも思えぬ
動物たちの天国を作りだしている。堂々たる年寄りの雄ゾ
ウにひきいられたゾウの群れがゆうゆうと歩きまわってい
るが、そういう年老いたゾウたちがつけているみごとな象

牙は、全部で九十キロにも達するにちがいない。そのほか、エランドやクーズーの群れ、シマウマとヌーにインパラの混じった群れなどが、いたるところにのどかな風景をくりひろげている。しかもそういう草食獣が豊富にいるアフリカ原野の例にもれず、ここはまたカモシカ(レイヨウ)たちを餌にして生活を支える猛獣たちの天国でもあった。そしてこの天国こそ、同時にわたしの当時のすみ家でもあったのだ。わたしはこの大きな河にはさまれた野獣の国で、狩猟監視官としておよそ五年の歳月を送ったのである。

ここはたしかに野獣の天国であった。しかし同時にここにはあらゆる危険が満ち、一瞬のゆだんがそのまま生命をおびやかす恐るべき危機につながっていた。ここでは死神たちは、たしかにほんのちょっとした気のゆるみとか、ついうっかりゆだんをする一瞬とかを昼夜のべつなく狙っていた。そしていったんゆだんしたがいご、ふだんはその勇猛さで叢林地帯を制圧している猛獣たちでも、たちまち、狩るものから狩られるものの立場へ逆転してしまうのだった。

わたしがここにこれから記す物語も、やはり、そういう猛獣たちの一瞬のゆだんがかれらの運命を狂わせたことをきっかけにおこったのである。

ある日の午後おそく、わたしはリンボボ河の水辺へ、河の水位を調べにおりていった。水辺の近くに印をつけた杭

が立ててあり、それによって河水の増減を記録し、氾濫に備えて万全の警戒を行なうのも監視官としてのわたしの役目なのである。

わたしが水辺に近づいてゆくと、注意していなければそのまま見過ごしてしまいそうなごくかすかな波紋が、水の表面に現われた。それも深い水のなかへまっすぐにさしこんだ水位測定用の杭のすぐそばである。あきらかに水中のワニの尾が作りだす波紋である。これはアフリカでは少しも珍しいことではない。たいていの河川には、ほとんどどこにでもワニがいる。たしかに珍しいことではないが、そのときわたしは急いで後へ退いた。水面のかすかな波紋につづいて、大きな泥水の渦が巻きおこったからである。水中にかなり大きなワニがひそみ、水辺へ近づくと獲物を一気に水中へひきこもうと身構えていることは、一目であきらかだった。

わたしはその危険な場所から身をひいて、いちおう安全な所へ移動し、そこから水位柱の数字を読みとって手帳に記録した。すると急にそばの藪がさがさと音を立てて、三十メートルほど離れた風上に美しいチーターが一頭姿を現わした。黒く光る鼻先を高く空中に突きあげて、空気の臭いをかぎはじめた。そして周囲の空気に異状がないことをたしかめると、そろそろと河岸を下り、つい今しがたわたしが立っていた岸辺におりていった。

チーターは水辺におりてゆっくりと水に口をつけ、び

ちゃびちゃと音をたてて二くち三くち水を飲んだが、ついではっと身を固くして、じっと水面に目をすえた。ワニはさっきわたしの姿を認めてから静かに水辺へ近づいて、水面に鼻と眼を出していたのだ。たしかにワニは鼻先と両眼を水の上に出していたが、不注意に水辺へ近づいたものには、それはあたかも、水中にある岩の一角が、水の面に出ているようにしかみえない。チーターは、いま突然、目の前の黄緑色に輝くワニの目に映ったじぶんの姿を見た。つづいてチーターは、鋭い鳥のような驚きの叫びをあげたが、同時に水中の怪物は泥水を蹴って躍りあがった。ワニは赤い口を大きく開いたと思うと、あっという間にチーターの頭をがんじょうなあごにがっちり捕らえた。チーターは頭を捕らえられたまま四つ足をふんばり、ワニを陸へひきあげようと必死のあがきをはじめたが、ワニも負けてはいなかった。尾っぽで掻きまわす背後の泥水は熱湯のようにわきかえり、大きな獲物をくわえたまま、じりじりと相手を水の中へひきこみはじめた。獲物を捕らえたワニは、必ず水中へ獲物をひきこんで溺れさせるのだ。

わたしはすぐさま、口径三七五マグナム・ライフルでワニの頭に速射を浴びせた。ほとんど水中に体を没していたワニは、十センチほど水のなかに沈んだが、弾はワニの頭にあたっただけで水をはねとばし、ひゅーんという唸りを水上に残してかなたに消えた。

ワニは口にくわえていたチーターを投げだし、後ざまに

水中へ滑りこんだ。しかしそれは弾丸の衝撃で一時ぼっとなっただけで、すぐ正気にもどると、大きく体をひるがえして河底へ全速力でもぐっていった。そのときわたしは、ワニの右腕のつけ根に巻かれた鎖をはっきり認めた。ムレンベである。ムレンベはバクワナ族が神聖なワニとしてあがめているこの河の主で、何十年前前には、この河岸へきてムレンベを拜むバクワナ族の参詣者が絶えなかったものである。そのムレンベという名の大ワニは、当時参詣者の呼び声に答えて水中から現われ、食べ物をもったり拜まれたりしていた。ところがその後アフリカ人たちが次第に文明化するにしたがい、今ではだれもワニなど拜む者がなくなつて、いつのまにかムレンベは純粹に野生化したワニとなつて、この河に近づく獲物を襲うようになっていた。

わたしは銃を装填しなおすと、すぐ河岸の砂をけたてて現場へ走った。チーターはイギリス政府が法律で定めた特別保護獣なのだから、わたしとしては、なんとしても救う義務があった。しかしわたしがかけつけたとき、その優雅な猛獣はすでに頭をさんざん噛み砕かれた姿で、あたりの水を赤く染め、浅瀬のなかにのめりこむようにして死んでいた。そばへ行つて死骸を調べてみて、すぐにそれが子持ちの母親であることがわかった。乳房が赤く大きくふくらんでいるのだ。どうやら日暮れまでに子どもたちのところへ帰ろうとして、その前に水をひと口飲んで行こうと

したことが、命を落とすことになったようだった。この日はたまたまわたしがそばに居合わせた、アフリカの自然の中では元来^{がんた}こうした悲劇は毎日どこかで数知れずおこっている。ただその大部分はだれも知る人がなく、なんの記録も残されずに、永久に過去の中へ葬られてゆくだけなのだ。

チーターは元来家族的で、協調精神に富んだ動物である。したがって日常の生活や狩りも、夫婦や家族ぐるみでやることが多い。そして子どもたちの養育中に、夫婦の内どちらかいつぼうが倒れると、たいてい他方が責任をもって子どもたちを育てあげる。だから今の場合、母親のチーターがワニのために命を落としても、つれあいの父親が子どもたちのめんどうをみることははっきりしていた。ただ問題は、子どもたちが、父親から与えられる食事で育つほど大きくなっていくかどうかということである。母親の乳房が赤くふくらんでいるのを見ると、おそらくまだ授乳中なのだろう。そうだとすれば、チーターの子どもたちは、いくら父親が奮闘しても餓死するほかはない。わたしはすぐさまチーターの子どもをさがしにかかった。

銃声を聞いて、スワナ族の助手フレディが、すぐ現場へやってきた。子どもをさがすといっても、元来敵に居所を知られないように叢林の中にひそんでいる野獣の子をさがすのは、容易なことではない。まずわたしは、じっさいにチーターの子をさがしにかかる前に、フレディに命じて、

死んだチーターの母親をランドローバー（荒地走行用のジープに似た車）に積ませ、いったんキャンプへ引きあげた。前にも話したようにチーターは特別保護獣であるから、下手にチーターの毛皮など干しておくと、とんでもない誤解を招きかねない。わたし自身が狩猟監視官であるだけに、できるだけそういう誤解されやすいことは避けたかった。しかし今の場合、万力^{まんりき}で潰したように噛み砕かれた頭があるので、それほど気にすることもなさそうだった。そこでわたしは生皮をはぎ終わると、かまわずそれをじぶんのキャンプの前の杭に張り渡して干させた。

あくる日はなにごともなく過ぎた。そして河岸の悲劇から二日目の夜、突然わたしは夜中に哀調を帯びたチーターの悲しげな呼び声に夢を破られた。最近子を産んだフォックス・テリアのレックスが暗がりです頭を持ちあげて低く唸った。

チーターの悲痛な叫びは、キャンプのごく近くから聞こえてくる。どうやら、死んだ雌を求めて、つれあいの雄がほえているらしい。キャンプに生皮が干してあるので、雄はキャンプ周辺にじぶんの妻の臭いをかぎつけ、そばへきて呼んでいるらしい。チーターは猛獣のうちでも体が大きいほうであるが、どういうわけか気が弱く、いつもはキャンプにもめったに寄りつかない。今も近くへはきたが、少し離れたところから呼ぶだけで、近づいてこようとしなのだろう。

そんなことを考えているうちに、わたしはまたいつの間にか眠りにおちた。ハイエナの凄みを帯びたうすきみの悪い鳴き声が、夢とうつつの間に聞こえていた。

「アウルルーエエ、アウルルーエエ」

闇夜の叢林に、ハイエナの叫びは、思わずぞっとするような奇怪な妄想をおこさせる。そのハイエナの叫びも、やがてほんのしばらくでやんだが、つづいて猛烈な咆哮とわめき声、ネコ族のしゅっという怒りの叫びが、静かな夜気をつんざいてわきおこった。騒ぎはあつというまにおさまり、あたりにはまだ底知れぬ静寂が入れかわった。しかしそれも長くはつづかなかつた。今度は前よりもいっそう激しい騒ぎが耳もきこえなくなるばかり、キャンプのすぐま近で巻きおこったのである。

とうとうわたしはいたたまれなくなつて、懐中電燈と銃をつかんで外へでた。うしろからイヌのレックスがついてきた。外へでると電燈の光の中に影が入り乱れ、いくつもの野獣の目が緑色に光りながら四方八方に散った。

「チタタタ、チタタタ！」

気がいがいたずらを見つけられて、照れかくしに笑いながら逃げ去るときのような、異様に華やいだ嬌声を残して、ハイエナたちのぶかっこうな体は、つぎつぎと暗い藪のなかへかけこんでいった。つづいてそのとき、光の中に黄色っぽい大きな野獣が弧を描いて、藪のなかへ飛びこむのを認めた。大きなチーターである。長い足と優雅な身の

こなしにすんなりと長い尾、まず絶対に見まちがうことのないチーターの特徴である。レックスはすぐに藪へとびこんで、ハイエナを追い散らした。

おそらくさっきの騒ぎは、キャンプの前に干してあるチーターの生皮を盗もうと近づいてきたハイエナの群れが、それを守ろうとした雄チーターと一戦交えた時の騒ぎにちがいない。わたしはその夜はそのままレックスを呼んで家へはいり、ふたたび床についた。

あくる朝、わたしたちは夜明けとともに外へでて、昨夜の足跡を調べた。叢林の中の足跡調べは、いわば新聞を読むようなもので、ゆうべキャンプの周辺にどういふ動物が現われ、どういう事がおこったかが、印刷された活字を読むように、はっきりとわかるのである。

昨夜の騒ぎの予想はあたっていた。チーターはいなくなつたつれあいの臭いを求めて、まずためらいがちにキャンプへ近づいている。そのあいだチーターはあのやりきれない悲しみに満ちた鳴き声をあげて、相手を呼んでいたのだらう。そうやってキャンプの近くでさかんに妻のチーターを呼んだが、いっこうに返事がない。しかしなつかしい妻の体臭は、ますます濃くなるいっぽうである。そこでつい意を決してキャンプへはいってきたが、そこにあつたのは、杭に打ちかけられた愛する妻の生皮だったのだ。いっぽうそのころ、ハイエナも、やはり藪のなかから生皮の臭いをたどり、このほうは純粹に食欲にそそのかされて、八

方からキャンプに近づいた。やがてそれがチーターとの一戦を引きおこすことになったのだ。生皮の干し場に迫るハイエナの足跡と、それを迎え討った雄チーターの足跡が、広場でひとつになって入り乱れていた。

キャンプの周囲には、いつも腹をすかせたハイエナがいて二、三匹がいっしょになって、夜になるといろんなものをかすめにくる。二、三匹が団になってキャンプをかけぬけ、そのかけぬけるとちゅうで、そのへんにある口にはいりそうなものを、はじからひつつかんでとんで逃げる。干肉、残飯、骨屑、それにかちかちになった古い皮まで、手あたり次第に掻きさらってゆくのだ。だからその夜も生皮の臭いにつられてやってきて、いつものようにかけ抜けひったくりをやるうと思っただけの、おどろいたことに、その夜は予期せぬ番人が、ごちそうの前にがんばっていたというわけだ。

チーターは、その夜のハイエナとの格闘で傷を受けたようだった。叢林へつづいているチーターの足跡に、ところどころ血痕がついていた。わたしはさっそくフレディとレックスを連れて、チーターの足跡を追った。フレディは叢林の知識にたけ、獣の足跡を追うのにきわだった才能を持っていた。わたしたちは足跡を追って、たちまち八キロちかくも進んだ。藪はしだいにうすれ、同時に足跡もわからなくなってしまった。

わたしたちはしきりに付近を歩きまわり、やがて大きな

窪地くぼちの前で、ふたたび足跡を見つけた。窪地はいちめんに丈高い草におおわれ、まん中あたりに一本だけマルラの木が生えていた。窪地のそばに立つと、フレディは黙って木のほうを目で示した。わたしたちはその場に立ったまま、じっと耳を澄ました。まぎれもなく幼獣が、お腹をすかせて泣きわめくような悲鳴が聞こえてきた。どうやらさがし求めていたチーターの寝ぐらと幼獣たちの巣は、この窪地のなからしい。キバシサイチョウが高い枝にとまっている。アフリカ人たちはこの鳥のことをカト・カトと呼んでいる。わたしたちがそっと窪地へ足を踏み入れると、サイチョウはけたたましい警戒の叫びをあげた。そのとき、父親のチーターが、わたしを巣のあるところから引き離そうとするように、牽制しながら窪地の草むらから逃げだしてゆくのがみえた。同時にサイチョウが大声でわめきながら、枝を離れて舞いあがった。窪地はかなりの広さがあり、丈高い草のなかには落ち葉や枯れ枝が厚く散って、そのあたりいちめんに敷きつめたようになっていたが、むしろそのなかに親チーターが二頭もいれば、すぐに居所がわかるようなところだった。

つまりそこは、幼獣たちにとってはいい隠れ処にちがいないが、成獣が敵から身を隠しおおせるには、少々つごうの悪い場所だったのである。親チーターはそれを知っていて、すぐにそこをとびだしてしまったのであるが、いくらわたしたちの目がよくても、イヌのレックスがいなければ

ば、到底チーターの子どもたちを見つけることはできなかったにちがいない。

幼獣たちは、草むらの中を近づいてくる敵の足音を聞いて、じっと草の陰に身をひそめていた。レックスが嗅ぎあてた草の中に、生まれて間もないチーターの子が三匹うずくまっており、一メートルほど離れたところに小さな肉の堆積があった。肉はいずれも細かく噛んであって、あきらかに父親のチーターが、子どもたちのために噛んで吐き出したものだった。母親の乳がなくなつたので、父親は子どもたちの飢えを満たしてやるために、チーターが母乳のつぎに子どもたちに与える餌を、いそいで用意してやつたものであろう。ところが、その肉の山には、子どもたちが口をつけたあととはなかった。子どもたちの大きさや、斑点のない黄褐色に灰色がかつた毛皮のようすなどから、どうやら生後二週間になるかならぬくらいと思われた。子どもたちが父親の噛み餌を食べられるようになるのは、生後何週間もたってからのことである。

子どもたちはひどくやせていた。おそろくもう二日以上も、なにも口にしていないのではなからうか。つまみあげてみると、まるでただの毛糸玉のように軽く、とてもそれが肉体をもつた獣の子だとは思えなかった。動物の子は小さければ小さいなりに、手に持ってみれば必ず精気に満ちた潑刺たる体の重みを感じるものなのだ。しかしそのチーターの子どもたちにはそれがなかった。幼獣の食欲はすさ

まじいので、一日でも絶食させると、たちまちやせ衰えてしまう。そばにある手つかずの噛み肉の山、羽の塊りのように軽い体重、これはもうあきらかに餓死寸前の状態であり、父親は乳を求めて泣きわめく子どもたちを、ただ気づかわしげに見守るよりほかないにちがいない。

わたしはいそいで雌イヌのレックスをその場に寝かせると、チーターの子たちをレックスの乳房のそばへ置いてやった。子どもたちはすぐに、もともと体を動かして、なつかしいミルクの臭いのする乳房にすがりつき、三匹が争って乳房をくわえたまま、夢中でレックスの下腹をおしまくりだした。レックスは頭を持ちあげ、歯をむきだして唸りながら、じぶんの乳房にむしゃぶりついた異様な赤ん坊たちをにらんだ。わたしはいそいで、よしよしといいながら、レックスの背中をなでて、いっしょうけんめいなだめてやった。そうやって主人に優しくなだめられたのと、イヌの母性本能が見知らぬ動物の子に対する嫌悪にうちかつたらしく、レックスはやがて唸るのをやめて、チーターの赤ん坊たちが乳房を吸うにまかせた。静かな窪地の草の中に、それからしばらくの間、飢えた三匹の赤ん坊がいそがしく乳房をしゃぶる音がつづいた。

三匹のうち一匹だけが雌だったが、この女の子が一番元気が良く、また乱暴なようだった。その子はじぶんがしゃぶりついた乳房をいちはやく吸いつくすと、さっそく隣の兄弟たちをおしのけて、もっとミルクを飲もうとけんかを

はじめた。そしてさんざん奮闘したあげく、みごとに兄弟たちのわけ前をぶんどってしまった。

小さいくせに、まるで命がけのようなとっ組みあいをするのいかにもおかしくて、わたしは思わず吹きだしながら、雌ではあるがその子のことを「チャーキー（厚かましい）・チャーリー」と呼んだ。助手のフレディは、その名前が気に入らぬらしく、へだんな、それはいけませんというようにそばで首をふった。

三匹を抱いてキャンプへ帰りながら、わたしはレックスのことが気がかりだった。さっきはおとなしく、チーターの赤ん坊に乳房をふくませたが、これでキャンプへ帰ればどうなるのだろう。レックスには発育ざかりの子イヌが二匹いて、いずれも乾いた大地のように、際限なくミルクをほしがっているのだ。そういう健康で食欲旺盛なじぶんの子のほかに、さらにすさまじい食欲をもつ野獣の子を三匹も養いきれるかどうかである。たとえレックスにその気があっても、それでは母乳が枯渇してしまうのではないかと心配だった。

キャンプへ帰ると、とたんにレックスはじぶんの本来の義務に目ざめた。じぶんにはちゃんと養育しなければならぬ子イヌたちがいる。野獣の子の養母などまっぴらだというわけだろう。さっそくじぶんの子イヌたちをだいいじそうにかかえこんで、チーターの赤ん坊が近づくと牙をむいて

追い払った。これはえらいことになったと思ったが、今さらくやんでもしかたがない。けっきょくわたしが三匹のチーターの子を養子にして、なんとか育てなければならぬ羽目になったわけである。

まずわたしはお湯をわかし、ブラシを持ちだして、毛糸玉がほつたようなぶざまなりの赤ん坊の毛並みをそろえ、暖かいお湯につけた布で、ごしごしと三匹を順々にふいてやった。ふき終わると赤ん坊たちはいくらかかわいらしさをとりもどしたので、つぎにいよいよ、粉ミルクをとかして哺乳することになった。乳房の代用になるものをいろいろさがしたが、けっきょくなんとか使えそうなのは、お尻にゴムのついたガラスのスポイト一本だった。

まず乳を与えるには、時間をはっきりきめたほうがよろうと、いちおう二時間ごとに与えることにした。しかしいよいよミルクを与えてみると、これは思ったよりめんどくさく退屈な仕事だった。なにしろスポイトは一本しかない。一匹ずつひざに抱きあげて、大変な苦勞をしながら飲ませるのだが、つぎつぎに抱きあげてやっとひとまわりすむころには、また最初の子につぎのミルクをやらなければならぬ。けっきょくわたしは一日中チーターの赤ん坊をとつかえひきかえひざに抱きあげて、小さな口にスポイトをさしこむという授乳ロボットになってしまった。

それも赤ん坊たちがすくすくと育てばまだ救われるのだが、母乳に飢えているところへいきなりイヌの乳や粉ミル

クのとかしたのを流しこんだので、当然のことながらひどい腹くだしをおこした。わたしはなんとかその下痢をとめようと、ミルクのなかへ細かく砕いた炭の粉と蒼鉛をひとさじ混ぜて与えた。しかし下痢はとまるところか、ますます激しくなった。こうなればあと頼れるものは、クロロダインしかない。わたしはすぐミルクにクロロダインを混ぜて与えたが、むろんいい味がするはずはない。赤ん坊たちは体をよじって、その嫌な味のミルクをはねつけた。わたしはいやがる赤ん坊にむりやり薬入りのミルクをふくませたが、それはいかにも弱い生き物を拷問にかけているようにやだった。

赤ん坊たちは、いずれも異様な薬のにおいをするミルクを嫌ったが、「厚かまし屋のチャーリー」だけは、勇敢にそのまずいミルクを飲んだ。むろんその子は、それだけ生きる意欲が強かったともいえるし、また雌であるだけに急場を切り抜ける強い体力を、生まれるながらに備えていたともいえるが、とにかく薬入りミルクの効果もあって、たちまち他の兄弟をひきはなして、めきめき元気を回復していった。しかし浮かばれないのは他の二匹だった。ミルクもろくに飲まず下痢ばかりするので、体からはしだいに水気がなくなり、ミイラのようにやせこけて、文字どおり骨と皮ばかりの衰れなありさまになってしまった。これでもいい生きられるのだろうか。わたしはそろそろそんな不安を覚えながら、かろうじて生きているといった状態になっ

てしまった二匹を、夜中にそっとおきて眺めてみたりした。

二匹のうちでも、とくに一匹の子の衰弱が激しかった。その子はキャンブへ連れて帰った最初の日から、それとなく気づいていたのだが、ミルクを口にふくませると、そのミルクを鼻から吹きだすのである。最初はたいして気にしなかったが、二、三日してもそういう状態がなおらないので、その子の口をあけて調べてみると、口のなかが余分に裂けているのに気づいた。その傷はむろん先天的なものと思われたが、そのためいったん口に入れたミルクが鼻孔へ流れこんで、鼻の穴から出てくるのだった。この子は体も一番小さかったが、下痢をしてからいっそう衰弱が激しく、とうとう二週間目に死んでしまった。

わたしがそうやって、なれない乳母の役目を一人でひきうけ、てんてこまいしながらとうとう一匹に死なれてがっかりしているというのに、雌イヌのレックスは少しもわたしに同情しようとはしなかった。じぶんの子イヌをだいいじそうに抱いて、チーターの子にはみむきもしない。夜は寒いので、わたしは夕方になるとそっとチーターの子をレックスのバスケットへ入れておく。レックスは気がすすまぬようすながら、主人からの預かりもののなので、そのときはたいしてもんくもいわないが、夜になるとこっそりじぶんの子イヌをよそへ連れて行ってちがうところで寝てしまふ。あとにはチーターの子が体を寄せあってキーキー鳴き